入江泰吉記念奈良市写真美術館が考える「写真芸術とAI」

入江泰吉記念奈良市写真美術館 館長　大西　洋 氏

火曜午餐会９月第１例会を５日、当部５階大会議室にて開催した。2022年４月に新館長として就任された大西洋氏は、アナログとデジタル、それぞれの良さを生かして写真文化を積極的に発信、新しい形での美術館づくりに力強く邁進されている。

【奈良市写真美術館の成り立ち】

奈良市写真美術館は、1992年４月に西日本最初の公立の写真専門美術館として開館した。東大寺・春日大社の南に位置し、春日山・高円山の山麓にあたる。古代は、万葉集に詠まれたところであり、近代では文豪・志賀直哉が高畑に居を構えたところとして知られる。美術館の東隣には、奈良時代の国宝・十二神将像で有名な新薬師寺が建つなど、歴史的情緒に満ちている。設立の発端は、約半世紀にわたり奈良大和路の風景や仏像、伝統行事などを撮り続けてきた奈良市出身の写真家・入江泰吉（1905 ～ 1992）が、生前、自身の全作品（フィルム約15万点）を奈良市に寄贈したことに始まる。これを受けて市は、市民や奈良を訪れる人々に入江作品をはじめ多様な写真作品を鑑賞してもらう目的で、開館した。2007年に運営母体の統合から入江泰吉記念奈良市写真美術館に正式名称を変更。また、東大寺旧境内にある彼の旧邸も2015年から一般公開している。入江作品を基調としながら、国内外で活躍している写真家を取り上げて展示している。写真文化・芸術の発信拠点として、または写真作品を通じて市民や奈良を訪れる人々に、古都奈良が醸し出す歴史と文化の真髄に触れてもらえるよう努力している。

【３つの冠を持つ美術館】

当館は、「入江泰吉」「奈良市」「写真」の３つの冠を持つ全国でも稀有な美術館である。「入江泰吉」では、奈良市に寄贈された全作品の保存、研究、普及を行っている。「奈良市」では、公的な美術館としての、基礎自治体の美術館としての市民に対する取り組みを進めている。「写真」では、西日本初の（かつ最大規模の）写真美術館として、写真の研究・普及に注力している。設立時の時代背景を踏まえ、設立からの20年間は、入江泰吉作品と市民への取り組みを中心に活動してきた。2015年に当館で初の外部登用館長が誕生することをきっかけに、写真を主軸とした芸術写真やスナップ写真などの国内作家の展覧会を開始した。写真文化の普及を市外、県外を中心に推進し、全国に数館しかない写真美術館としての役割を果たしてきた。2022年４月から私は、２代目の外部登用の館長として活動を引き継ぐこととなった。

【入江泰吉作品のデジタル化により描かれる未来】

約15万点あるフィルムのデジタル化を数年前から実施しているが、ここ近年急速に普及し高性能化した電子機器の恩恵を享受しデジタル化を加速させている。作業としては、フィルムをデジカメで撮影して色を補正する。データを機器、クラウドに保存していく。無論、作品の保存は重要な役割であるが、大量なデータを保有・収蔵するだけではなく「データ化の先にある未来」をどのように描けるか、取り組むかが重要になる。

カラーポジフィルムの暗部劣化（暗部での保存に関わらず青が抜けフィルム全体が赤くなる現象）の復元は大きな課題となっている。これまでも、時間をかけ復元をアナログプロセスで実施はしているものの時間と費用が必要で１万枚以上の復元必要性があるフィルムを対処するためにはデジタルプロセスでのアプローチが必要不可欠である。しかし、当館が持つリソースで解決することは困難であると考え、奈良市が協定を結んだ奈良女子大学工学部の門を叩いた。幸運なことにアートに長けた教授との出会いにより問題の解決、未来への取り組みへ大きな一歩を踏み出すことができた。

【写真芸術と AI】

奈良女子大学工学部との連携により、本年度は文化庁から大学との共同で２つの事業が採択され、実施することとなった。

これにより、数年前より急速に進化をしている「メタバース」「NFT」そして「AI」に対して

当館としてより多角的に「未来」に取り組むことが可能となった。画像生成 AI は単語をコンピュータに入力することにより画像を生成するが、この技術は、この１年で写真の専門家でさえも区別が難しい程度まで進化している。写真は約200年前にカメラによって誕生した。その出現に対し、画家たちからの反発は激しく、写真の使用を禁止するよう政府に訴えるアカデミーも存在した。結果的には、その後画家は多様な技法を生み出し日本でも人気の高い印象派に大きな影響を与え、「モネ」など多くの作品が生まれることとなった。これらは、カメラの誕生によって起きた出来事である。そして今、「AI」はもしかすると当時の「カメラ」なのかもしれない。先人たちが示してくれた歴史と、その未来を踏まえ当館としては現在デジタル分野に取り組んでいる。

【最後に】

当館は、アナログとデジタルのハーモニーを追求し、これらを最適に組み合わせることで新しい美術館の形を目指している。近年、プリント代や資材費の上昇、さらに施設の維持管理コストなど、写真家や美術館運営の負担が増している中、当館は伝統的なプリント写真の持つ深い魅力や価値を訪れる人々にしっかりと伝えていくことを最優先と考えている。この伝統的な技法と現代の技術が融合する点において、当館は他の美術館とは一線を画している。クラシカルなフレームやマットを駆使したアナログの展覧会形式は、これからも当館の特色として継続的に発信していく意向である。

一方、デジタル技術の進化も積極的に取り入れている。特に、山間部に住む子供たちや年配の者たちにも、美術館の魅力を届けるための「メタバース出張美術館」を開催。このプロジェクトは非常に注目されており、今年度には、既に５箇所での実施が計画されている。さらに、最新の「画像生成 AI」技術を用いて、言葉と画像（写真）の関係性を探求する新しい試みも展開している。これらは、美術館ならではの教育普及の一環として、多くの者たちに新しい体験や発見を提供するための取り組みである。当館の挑戦は、常に新しい価値の創出と、それを広く共有することに焦点を当てている。

当館では、「写真教室」「展覧会審査」「出張美術館」といった多彩なプログラムを展開しております。これらの活動は、訪れる皆様に写真の魅力をより深く感じていただくための取り組みでございます。また、奈良の素晴らしい企業様との連携を通じた新しいプロジェクトや試みも、今後一層推進して参りたいと考えております。皆様からのご要望、ご提案、またはご相談がある場合、どうぞお気軽に当館までお知らせくださいませ。それぞれの声を大切にし、より良いサービス向上を目指しております。また、お近くへのお出かけの際には、是非とも当館にお立ち寄りいただき、私たちの取り組みや展示をご高覧いただけることを心よりお待ち申し上げております。

入江泰吉記念奈良市写真美術館
630-8301奈良市高畑町600－1
電話：042-22-9811
HP：naracmp.jp
E-mail：info@naracmp.jp